

# 日本史 アツプデート

## 幕府海軍

江戸幕府が整備した海軍は強大で諸藩の海軍を圧倒していた。軍艦の操作や海軍の運用は近世の論理ではできないと悟り、自分にとらわれない人事制度を完成させ、「水軍の洋式化」ではない近代的な組織を作り上げて短期間で急速に進歩した。

- ・ゼロから海軍を創設した中で課題は多く、艦同士、あるいは陸

### ことに注目!

軍と連携した戦い方はできず、海難事故も多発した。

- ・海軍の創設や蒸気船の導入が、人や物資、資金の動きを加速化、広域化させ、歴史の変革の動力源になった。寄港地の地域社会を活性化させた面もある。旧幕府の海軍は明治海軍の礎となり、日清戦争の勝利にもつながった。

# 明治以降の変革の礎

### 幕府海軍を巡る動き

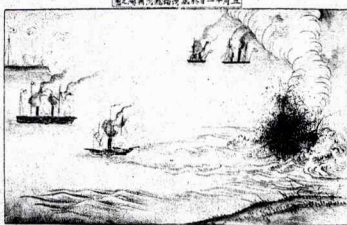
- 1853年 ペリー来航
- 1855年 長崎海軍伝習所開設
- 1860年 威臨丸が太平洋横断
- 1864年 将軍徳川家茂上洛。その際海路で江戸・大坂間を移動
- 1866年 第2次幕長戦争
- 1868～69年 戊辰戦争。榎本武揚らが箱館で降伏

幕末に薩摩藩や長州藩などと戦った幕府軍は、維新の引き立て役のように見られることが多い。だが、幕府が整備した海軍は強大で、明治以降の海軍の礎になったことが、近年の研究から明らかになっている。

1853年に来航した米国のペリー艦隊に所属していた蒸気船は、帆船に比べ航行速度などの性能が圧倒的だった。衝撃を受けた幕府は、台場(砲台)による防備だけでは不十分と判断し、洋式海軍を作るため、55年に長崎海軍伝習所を開設。オランダ人から教育を受けた。

幕府は軍事機密保持のため、各藩藩士たちの受講は段階的に許し、整備に向けた時間的な優位を得た。資金的にも西南諸藩を圧倒しており、軍艦の購入や運用などに多大な経費をつぎ込むことができ、乗組員候補となる家臣団の規模も各藩を上回っていた。神谷大介・横浜開港資料館調査研究員(幕末史)によると、63年までに購入した累計の洋式艦船数は、薩摩の5隻、長州の2隻に対し、幕府は15隻。同年時点で、各藩より大きな洋式艦船を数多く保有した。

14代将軍・徳川家茂は64年に上洛した際に、海路で



旧幕府海軍と新政府海軍の交戦を描いた「五月十一日於函館湾龍沈朝陽之図」。新政府軍の軍艦「朝陽」が爆発炎上している(函館市中央図書館所蔵)

江戸と大坂を往復。神谷研究員は、これが幕府海軍の一つの到達点だったとみる。海難事故が起これば将軍が命を失うリスクもある中、蒸気船を動かす技術が成熟したことを示したからだ。また、将軍が軍艦を率いて上洛したことは大きな政治的インパクトもあった。神谷研究員は「ペリー来航からわずか10年で、非常に大きな進歩を遂げており、戊辰戦争(68〜69年)時も、新政府軍は幕府の海軍力をかなり警戒していた」と評する。

進歩は人事制度面でも見られた。最新鋭の技術が詰まった蒸気船を動かすには、近代的な考え方を身につければならず、60年に威臨丸が米国に渡った航海では、家格などにこだわらず乗組員個々の能力に応じた配置が必要だと認識された。幕府の海軍は運用する艦船の数が多いため、近世の論理は通用せず、軍艦奉行などを務めた木村喜蔵らを中心に身分や出自にとらわれない人事制度を目指して少しずつ制度改革を進めていった。

金澤裕之(明治維新史)は、「幕府の海軍は、中世からの『水軍』を洋式化しただけではない。現場から近代の扉をこじ開けた」と強調する。ただ、人事制度が完成するのは、鳥羽・伏見の戦い(68年)の敗北後のことだった。

「ゼロから海軍を作り上げるには、様々な課題を克服しなければならなかった(金澤教授)のは事実だ。当時は日本沿岸の海図や、気象に関する知識が十分になく、座標などの海難事故が頻発。熟練した乗組員もいなかった。さらに艦船間で信号旗を組み合わせて連絡を取ることが行われておらず、各艦が1隻ずつ個別に戦い、陸軍との連携も取れていなかった。初の本格的な実戦となった66年の第2次幕長戦争(長州征伐)でも優位を生かせなかった。

金澤教授は「海軍は陸軍力や陸上の政治勢力と結びついて初めて意味がある。戊辰戦争時にも海軍は強大だったが、陸上の劣勢で石炭や弾薬の供給源を失い、戦略的な勝ち目がなくなるとする。」

神谷研究員は、幕末期の蒸気船導入や海軍創設には大きな意義があったと強調する。「人や物資、資金の動きを加速化・広域化させて政治・社会に大きな影響を与え、歴史の変革の動力源になった」からだ。さらに、石炭という新たな資源の採掘や輸送、寄港地での水や食料の搬入引き船(曳航)の需要などで、浦賀(神奈川県横浜須賀町)など活性化された地域も多いとする。

金澤教授も、海軍の整備が68年の維新時まで始まっていた可能性もあると明かす。清は66年に海軍建設を始め、資金力に物を言わせ、日清戦争(94〜95年)までの間、建艦競争で日本を圧倒していたからだ。戊辰戦争を生き残った多くの旧幕臣が明治海軍の礎となり、旧幕府海軍の艦船や造修施設などを引き継いでい

なかったら、日清戦争の勝敗はどうなっていたかわからない。「幕府海軍の13年間は、明治海軍の助走期間として非常に重要だった」と説く。(小林佑基)